

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 27 日現在

機関番号：34416

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19H01513

研究課題名(和文)重層的決済システムと中央銀行制度成立過程の再考

研究課題名(英文) Multiplex payment systems and the evolution of central banking

研究代表者

西村 雄志 (Nishimura, Takeshi)

関西大学・経済学部・教授

研究者番号：10412420

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、先行研究では別々に研究されてきたフォーマルな決済システムとインフォーマルな決済システムについて、世界市場が一体性を強める過程で相互に関係性を強め、一つの「纏まり」を形成していった事象を実証的に明らかにした。そのプロセスは、各々の地域における独自の様々な商慣習に基づいて規定されるものであり、インフォーマルな決済システムもフォーマルな決済システムも自らのかたちを「再編」させ、ひとつの「纏まり」を有する重層的決済システムを構築させていくことで成し遂げられていった。中央銀行制度もまた重層的決済システムの一つであり、先行研究が考察する中央銀行制度の役割について修正を迫ることに成功した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の目的は、各地域において長年培われてきた商慣習に基づいて成立していたインフォーマルな決済システムの役割と中央銀行制度の関係性を明らかにするとともに、先行研究において中央銀行制度の導入により近代銀行業をはじめとするフォーマルな決済システムが成立し、非効率なインフォーマルな決済システムが駆逐されたとする議論を修正することであった。実際に世界各地で中央銀行制度の導入後もインフォーマルな決済システムが残存して現地経済で大きな役割を担い続けていた事例は数多く見られており、先行研究は決済システムに関する中央銀行制度の役割を過大に評価していたと言える。その点を本プロジェクトは実証的に修正した。

研究成果の概要(英文)：This project empirically clarifies how formal and informal payment systems, which have been studied separately in previous studies, have strengthened their connections with each other and was integrated in the process of strengthening the unity of the global market. The processes were defined by the various business practices and traditional cultures to each region, and was achieved by both informal and formal payment systems 'reorganising' themselves to create a multiplex payment system with close connections, and the central banking system was also one of the most important functions of multiplex payment systems. This project also succeeded in forcing a revision of the contribution of the central banking system to the development of payment systems all over the world as considered by previous studies.

研究分野：経済史

キーワード：重層的決済システム 中央銀行制度 インフォーマル決済システム フォーマル決済システム 信用貨幣

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

19世紀中葉から20世紀初頭、両大戦間期から20世紀中葉の時期において、アジアやアフリカでは中央銀行制度を中心とした近代的な銀行業が設立され、同時に近代的な決済システムが導入された。しかし、現地経済においては、数世紀にわたって培われてきた商慣習あるいは文化に根差したインフォーマルな決済システムが引き続き機能しており、近代的な決済システムの様なフォーマルな決済システムが導入された後でも駆逐されず、現地経済の主要な決済を担い続けていた。換言すれば、これらインフォーマルな決済システムとフォーマルな決済システムは、共存しつつ棲み分けながら重層的な構造を構築して一つの「纏まり」となり、地域経済における決済の円滑化と効率化に一定の役割を担い続けていた。こうした研究視座は先行研究では見出されず、特にフォーマルな決済システムの中心的な役割と捉えられる中央銀行制度に焦点を当て、インフォーマルな決済システムとフォーマルな決済システムがどのような重層的な構造を構築するプロセスを辿ったのか、中央銀行制度が現地経済の状況に自らのかたちをどのように「再編」する選択を行っていたのか、十分に明らかにされてこなかった。

無論、これまでの研究において、重層的決済システムが具体的にどのように機能して現地経済の様々な取引の円滑化あるいは効率化に貢献する事が出来たのか、各々の事例研究の中で間接的に言及されてはいる。しかしながら、未だ明確なかたちで分析された研究は見出せておらず、この分野において残された大きな課題であった。重層的な決済システムが構築され、それが現地経済の活動の効率化に貢献していたことはある程度は確認出来ていたものの、実際に人々の間で行われた決済のレベルまでどのように関連していたのか十分に分析されていなかった。その中でも特にインフォーマルな決済システムにおける手形取引をはじめとする信用取引の研究は、貨幣や紙幣といった実際の交換手段の研究蓄積と比較して遅々として進んでいなかった。それはアジアやアフリカにおける事例研究だけでなく、日本やイングランドにおいても同様と言える。具体的に各々の現地経済の商慣習や文化に根差したかたちで発展してきた手形取引あるいはそれに類する信用取引がどのように運用されていたのか、またそれらの使用拡大が現地経済の取引の効率化にどのような貢献をしていたのか、これまでの研究において十分に明らかにされているとは言えない。各地域で形成された重層的決済システムにおいて、フォーマルな信用取引とインフォーマルな信用取引がどのように相互補完性を形成していったのか、実際に人々はどのように手形やそれに類した信用取引を行っていたのか、世界各地の事例研究を踏まえつつ明らかにする必要がある。また最近の経済社会における長期的発展の研究において、地域間の共通性や差異性を緻密に検出する等値的比較の方法が、経済社会の変化の理由としてだけではなく、既存の条件が変化しない理由の考察にも有効であることが示されており、こうした知見に基づき、この科研ではアジア(日本、朝鮮半島、インド、インドネシア)、ヨーロッパ(イングランド、オランダ)、アフリカ(セネガル)を等値的に比較して、各国・各地域において手形取引やそれに類する信用取引が重層的決済システムの中でどのように機能し、どのようなかたちで現地経済の発展に貢献したのか、実証的に明らかにしようと試みた。これらの知見により、従来の銀行史研究あるいは金融史研究の修正を試みようと考えた。

2. 研究の目的

この研究で取り組んだ内容の学術的独自性を挙げるとすれば、まず第1にこれまで銀行史研究や金融史研究において、中心的なトピックとして取り上げられてこなかったインフォーマルな決済システムにおける手形取引あるいは手形に類する信用取引のかたちに着目した事にある。このプロジェクトで取り上げたインフォーマルな決済システムと中央銀行制度をはじめとする銀行制度を中心としたフォーマルな決済システムはいずれも各々の現地経済の商慣習や文化に適應させて自らのかたちを「再編」させ、さらに相互の補完性を強める事により重層的決済システムを成立させていった。この点は先行研究からも間違いない。その成立のプロセスの中、インフォーマルな決済システムとフォーマルな決済システムのいずれにおいても手形取引あるいはそれに類する信用取引の利便性は高まり、その結果として、現地経済のローカルあるいはリージョナルな日々の経済活動の円滑化が促されたことは明らかである。こうした手形取引あるいはそれに類する信用取引の「再編」は、19世紀中葉以降の世界経済が一体性を増していく時期において、対外貿易をはじめとする様々な遠隔地取引も活発化させる事にも貢献した。換言すれば、この時期に急速に世界規模で物流が拡大出来た背景として、輸送通信技術の進歩だけでなく、各地で重層的決済システムが果たした役割も大変大きく、手形取引やそれに類する信用取引が各地域において相互補完的に一体性を有する「纏まり」を形成する事が出来てはじめて、それまで隔絶されていた各地域の市場が活発な財貨の交換を伴うかたちで世界市場の急速な統合を可能にしたと言える。しかし、このようなインフォーマルな決済システムとフォーマルな決済システムの「再編」とそれに伴う重層的決済システムの確立については、様々な先行研究で間接的に重要性が指摘されているものの、真正面から取り組まれてこなかった。本プロジェクトは、これらの先行研究が分析していない論点を、各地の事例研究を実証的に明らかにするものである。

第2の本研究の独自性は、イングランドをはじめとする金融組織が高度に発達した市場の中で

醸成された手形取引あるいはそれに類する信用取引のかたちこそが様々な決済に伴う取引コストの低減に最も貢献するものであり、19世紀中葉以降の輸送通信技術が急速に発展していった中、そのような手形取引あるいはそれに類する信用取引が世界各地に浸透した事が世界市場の一体化や世界貿易の拡大に貢献したと指摘する先行研究の議論に修正を迫る事であった。こうした先行研究の背景には、これらの研究の多くがイングランドをはじめとするヨーロッパで発達したフォーマルな決済制度における手形取引あるいはそれに類する信用取引の役割にのみ着目していた事があり、アジアやアフリカにおける現地経済の商慣習や文化に根ざして発達してきた手形取引やそれに類する信用取引を研究対象として取り上げてこなかった事が大きな要因であった。そのため本研究では地域研究の成果についても積極的にコミットし、幅広く他分野の研究を包摂して研究する。

第3の本研究の独自性は、近年多くの優れた研究成果を蓄積しているグローバル比較経済史の方法論を本研究に取り込む事により、これまでの金融史あるいは銀行史の先行研究では見出されていない新たな知見を見出す事であった。グローバル比較経済史においても金融史あるいは銀行史に関する研究は少ない事から、本研究で取り組むアジア、アフリカ、ヨーロッパ、日本の事例研究の分析は、グローバル比較経済史研究にも貢献するものと考えた。特に手形取引やそれに類する信用取引といった分野については十分な研究成果がグローバル比較経済史研究では出されているとは言えず、その点からも本研究で各地域の事例研究を可能な限り一次資料を駆使して実証的に明らかにする事の学術的意義は大きいと考えた。

3. 研究の方法

実証研究の基礎となる各地域における商慣習や文化に基づいて発達してきた手形取引やそれに類似する信用取引に関する事例研究とそれらが重層的決済システムの中でどのように機能していたのかについては以下のように役割分担して取り組んだ。

研究代表者・研究分担者

- ・ 西村：プロジェクト全体の総括。両大戦間期のインドにおけるフンディをはじめとする在来の信用取引とインド帝国銀行をはじめとする銀行組織の関係性について、ならびに重層的決済システムの観点からの実証分析。
- ・ 石川：植民地期前後の朝鮮半島における在来金融と銀行制度の関係性に関する実証分析。
- ・ 正木：20世紀初頭のセネガルにおける在来信用取引の発達とそれにコミットするセネガル銀行をはじめとする近代銀行業の関係性についての実証分析。
- ・ 加藤：主に近代移行期における関西の醸造業者が行っていた信用取引を事例とし、それら信用取引が近代銀行業の設立以降にどのような変容を遂げたのかについて重層的決済システムが成立するプロセスについての実証分析。
- ・ 鎮目：近代日本の発展過程における日本銀行の重層的決済システムに対するコミットに関する実証研究。
- ・ 杉原：グローバル・ヒストリーにおける手形取引をはじめとする信用取引の研究成果の位置付け。アジア・アフリカの事例研究の国際的位置付け。

研究協力者

- ・ 岩橋勝(松山大学)：近代移行期の西日本における信用取引の発達に関する実証分析。
- ・ 石津美奈(London School of Economic and Political Science)：主に18世紀のイングランド南西部における手形取引をはじめとする信用取引の発達過程に関する実証分析。
- ・ Christiaan van Bochove (Utrecht University)：近世オランダにおける信用取引の発達とアムステルダム為替銀行の関係性に関する実証分析。
- ・ Pat Hudson (Cardiff university)：産業革命期のイングランド北西部における手形取引をはじめとする信用取引の発達過程に関する実証研究。
- ・ 大石田真弥(東京大学大学院)：両大戦間期の中国における信用制度の成立過程と現地経済の関係性に関する実証分析。
- ・ Alberto Feenstra (Leiden University)：18世紀のインドネシアにおいてオランダ東インド会社を中心に行われていた信用取引に関する実証分析。

上記の研究課題に研究代表者・研究分担者・研究協力者が各々で取り組み、可能な限り一次資料を駆使して実証的に検討した。具体的な活動としては可能な限り頻繁に研究会を組織し、できれば国際経済史会議や社会経済史学会の全国大会でパネルでの報告を行った。プロジェクト終了後に速やかに研究成果を査読付き雑誌への投稿を各自で積極的に行う予定である。

4. 研究成果

本プロジェクトの期間は、当初から新型コロナの影響を強く受けており、研究分担者と研究協力者のいずれも一次資料の収集に苦慮するものとなった。しかしながら、これまで収集してきた一次資料を新たに分析し直す等、本プロジェクトの発展に資する研究を遅々とした歩みの中でも進めた。

(1) 第19回 国際経済史会議への参加

2022年7月25日から29日にパリで開催された国際経済史会議に参加した。研究分担者では石川が参加出来なかったが、他の研究分担者と海外の研究協力者でセッションを組織し、Mark Metzler氏をはじめ金融史の専門家をコメンテーターに御招きして活発な議論を行な

った。セッションの組織者でもあった西村はオンラインの参加となったが、対面参加の議論は大変有意義なものとなった。特に金融史分野の研究者からは、これまでの先行研究のどのような点について再修正を迫っているのか等、根本的な疑問が投げかけられる事があり、参加者にとって自らの問題関心の脆弱性を確認する貴重な機会となった。しかしながら、インフォーマルな決済システムと中央銀行制度をはじめとするフォーマルな決済システムが相互の関係性を緊密化していく中で現地経済の実相に合わせるかたちで自らのかたちを「再編」し、その結果として構築されていった重層的決済システムが19世紀以降の世界経済の急速な統合化の中で大きな役割を果たしていたとする私どもの指摘については、参加者の多くに意義を認めて頂けた。

- (2) 重層的決済システムの研究を進めていく中において、インドやセネガルの事例研究において、植民地支配との兼ね合いをどのように考えるか、日本やイングランドとは異なる問題点が析出された。インドの場合、植民地支配の中においても、インフォーマルな決済システムは強く残存しており、現地経済において大きな役割を担い続けていたが、セネガルの場合、植民地支配に伴う決済システムの「再編」はそれ以前と比較して大変大きな変化を伴うものであった。こうしたアジアやアフリカにおける地域ごとの事例を考察する中で、植民地支配の影響も重要な考察すべき論点として見出すことが出来た。この点については研究分担者の正木がプロジェクト終了後も引き続き取り組んでおり、研究代表者の西村もインドにおける両大戦間期の中央銀行制度の成立過程におけるインフォーマルな決済システムの変容過程について、プロジェクト終了後に引き続き取り組む予定にしている。
- (3) インドネシアに関しては、主にオランダ東インド会社の一次資料を用いて研究を進めてきた。そのため19世紀中葉以降の研究とは単純に比較は難しかったが、オランダの植民地支配と現地経済の関係性について決済の観点から新たな知見が得られた。この研究成果は近いうちに英語論文として刊行される予定である。
- (4) イングランドに関しては、これまでの地方の金融機関とイングランド銀行の関係性に着目して議論されることが多かったが、このプロジェクトでは地方銀行の一次資料をより丹念に調べることにより、イングランド銀行が中央銀行の役割を担うかたちで決済システムの統合が進められたとする先行研究にある程度の再修正を迫ることに成功した。つまり地方銀行においても現地経済の地域性や商慣習に合わせて自らの決済システムを「再編」することは行われており、それが必ずしもイングランド銀行やロンドンの金融機関との関係性にリンクするものではなかった。先行研究の多くで高度に発達した金融組織として取り上げられるイングランドにおいても地域の決済の特徴に合致させるかたちでシステムの「再編」が見出されたことは、本プロジェクトが提案する重層的決済システムがアジアやアフリカといった地域だけでなく世界の多くの地域で導入できる分析視座であると考えることが出来る。
- (5) オランダに関しては、時代的には主に近世を取り上げており、他の研究が主に近代を取り上げていた関係上、単純な比較は出来なかったが、オランダのアムステルダム為替銀行の事例は、近代の中央銀行制度の萌芽の事例として認識されている関係上、他の研究にも大変有意義な示唆を与えてくれた。特にアムステルダム為替銀行がどのように現地の商人と関係性を築いていったのかについては、他の地域の商人と金融組織の関係性を考える上で比較する軸となったと言える。先行研究でも雑駁には理解出来ていたオランダの決済システムであるが、本研究においてより実証性を高めることに成功したと言える。
- (6) 日本に関しては、近世から近代への移行期における決済システムの「再編」過程が主であった。江戸期の加賀藩の参勤交代等の様々な出費の事例や江戸末期の関西における私札の流通等、多くの一次資料から貴重な事例を抽出して分析した。先行研究においては、近世から近代へ移行期における両替商と近代銀行への転換について議論することが多いが、実際の商取引における決済のかたちはどのようなものであったか、今もまだ事例研究を積み重ねている最中である。今後、本プロジェクトでの成果は、日本語あるいは英語のかたちで論文として発表されていく予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計23件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 鎮目雅人	4. 巻 4
2. 論文標題 幕末維新期日本の貨幣制度と貨幣使用の変遷：デジタル通貨時代における複数通貨の併存と統合を見据えて	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 SBI金融経済研究所 所報	6. 最初と最後の頁 54-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 加藤慶一郎	4. 巻 24
2. 論文標題 藩札発行権の取得過程：享保十五年の徳島藩を中心に	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 大阪商業大学商業史博物館紀要	6. 最初と最後の頁 263-271
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西村雄志（編）、木山実、石川亮太、西村成弘、北波道子	4. 巻 178
2. 論文標題 近代大阪の朝鮮米流通：商人と同業団体を中心に	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 アジアにおける関西経済の発展：関西経済と近代アジア経済との密接な関係の歴史	6. 最初と最後の頁 71-102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 西村雄志（編）、木山実、石川亮太、西村成弘、北波道子	4. 巻 178
2. 論文標題 1920年代のインドにおける銀行業の概観	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 アジアにおける関西経済の発展：関西経済と近代アジア経済との密接な関係の歴史	6. 最初と最後の頁 51-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Toyomu Masaki	4. 巻 66(3)
2. 論文標題 The Management of the Bank of Senegal and the Formation of a Colonial Economy, 1840s-1901	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 African Studies Review	6. 最初と最後の頁 595-617
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1017/asr.2022.173	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加藤慶一郎	4. 巻 -
2. 論文標題 日本近世の「私札」：平野郷町を中心に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 加藤慶一郎(編著)『日本近世社会の展開と民間紙幣』(塙書房)	6. 最初と最後の頁 11-76
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Toyomu Masaki	4. 巻 -
2. 論文標題 Spheres of money, payments, and credit systems in the colony of Senegal in the long nineteenth century	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Pallaver, Karin ed. Monetary Transitions Currencies, Colonialism and African Societies, Springer	6. 最初と最後の頁 55-79
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Toyomu Masaki	4. 巻 105
2. 論文標題 The colonization of French West Africa and postal money transfer services 1874-1955: Seeking the origin of the compte d'operation	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Entreprises et Histoire	6. 最初と最後の頁 42-51
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鎮目雅人	4. 巻 44
2. 論文標題 歴史からみた現代貨幣理論の適用可能性	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 金融経済研究	6. 最初と最後の頁 115-129
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石川亮太	4. 巻 -
2. 論文標題 明治期朝鮮通漁における組織化の試み 朝鮮近海漁業連合会から朝鮮通漁組合連合会へ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 野世英水・加藤斗規(編)『近代東アジアと日本文化』(銀河書籍)	6. 最初と最後の頁 275-294
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石川亮太	4. 巻 -
2. 論文標題 交隣と貿易：開港前後の海藻輸出	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 岡本隆司(編)『交隣と東アジア：近世から近代へ』(名古屋大学出版会)	6. 最初と最後の頁 80-110
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石川亮太	4. 巻 -
2. 論文標題 交隣と条約：「自由貿易」と商業税をめぐる日朝交渉	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 岡本隆司(編)『交隣と東アジア：近世から近代へ』(名古屋大学出版会)	6. 最初と最後の頁 178-207
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 杉原薫	4. 巻 -
2. 論文標題 人新世における複数発展経路 - モンスーン・アジアの資源と生存基盤をめぐって -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 寺田匡宏・Daniel Niles編 『人新世を問う - 環境、人文、アジアの視点 - 』（京都大学学術出版会）	6. 最初と最後の頁 93-140
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鎮目雅人	4. 巻 -
2. 論文標題 紙幣統合への道程 : 明治初年の「銀行論争」再考	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 岩橋勝(編著) 『貨幣の統合と多様性のダイナミズム』 晃洋書房	6. 最初と最後の頁 245-268
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加藤慶一郎	4. 巻 -
2. 論文標題 大和国における紙幣 : 幕末維新时期の乱発状況を中心に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 岩橋勝(編著) 『貨幣の統合と多様性のダイナミズム』 晃洋書房	6. 最初と最後の頁 226-244
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩橋勝 西村雄志	4. 巻 -
2. 論文標題 歴史における貨幣へのまなざし	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 岩橋勝(編著) 『貨幣の統合と多様性のダイナミズム』 晃洋書房	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西村雄志	4. 巻 -
2. 論文標題 インド貨幣制度における金貨の役割	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 岩橋勝(編著)『貨幣の統合と多様性のダイナミズム』見洋書房	6. 最初と最後の頁 304-324
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加藤慶一郎	4. 巻 -
2. 論文標題 近世日本の紙幣 : 小規模藩・三日月藩を中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 鎮目雅人編『信用貨幣の生成: 近世-現代の歴史実証』(慶應義塾大学出版会)	6. 最初と最後の頁 77-118
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西村雄志	4. 巻 -
2. 論文標題 両大戦間期のインドにおける通貨制度と金融制度の「再編」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 鎮目雅人編『信用貨幣の生成: 近世-現代の歴史実証』(慶應義塾大学出版会)	6. 最初と最後の頁 335-388
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鎮目雅人	4. 巻 -
2. 論文標題 日本における近代信用貨幣への移行 : 国立銀行を中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 鎮目雅人編『信用貨幣の生成: 近世-現代の歴史実証』(慶應義塾大学出版会)	6. 最初と最後の頁 221-256
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鎮目雅人	4. 巻 -
2. 論文標題 信用貨幣をみる視点	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 鎮目雅人編『信用貨幣の生成：近世－現代の歴史実証』（慶應義塾大学出版会）	6. 最初と最後の頁 1-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加藤慶一郎	4. 巻 82(4)
2. 論文標題 （書評）高島正憲著『経済成長の日本史 古代から近世の超長期のGDP推計 730 - 1874』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 経済学論集	6. 最初と最後の頁 30-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 鎮目雅人	4. 巻 10月号
2. 論文標題 「お金」の今昔物語	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 経済セミナー	6. 最初と最後の頁 48-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件／うち国際学会 6件）

1. 発表者名 Toyomu Masaki
2. 発表標題 The Management of the Bank of Senegal and the Formation of a Colonial Economy, 1840-1901
3. 学会等名 Roundtable: Studying Transnational Money in Colonial Africa chaired by Gerold Krozewski, African Studies Association (USA) （国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Masato Shizume
2. 発表標題 Money Doctors and the Monetary Reform Debate During the Late 19 Century in Japan
3. 学会等名 European Historical Economics Society Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Toyomu Masaki
2. 発表標題 How France made Senegal its colony:From an Aspect of the Financial System Established in the Nineteenth Century
3. 学会等名 Annual Meeting of the African Economic History Network (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kaoru Sugihara
2. 発表標題 Indian Ocean Trade, 1910-1950
3. 学会等名 International Economic History Seminar (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kaoru Sugihara
2. 発表標題 Monetary Foundations of Indian Ocean Trade: Perspectives from Singapore, Aden and Bombay in the Early 20th Century
3. 学会等名 the 19th World Economic History Congress, Paris (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Toyomu Masaki
2. 発表標題 The French Invasion of Haut Senegal and payment issues:1880-1900 The emergence of a multiplex payment system
3. 学会等名 the 19th World Economic History Congress, Paris (国際学会)
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 脇村孝平(編)、杉原薫、佐藤孝宏、祖田亮次、小茄子川歩、谷口謙次、田辺明生、太田淳、神田さやか、小林和夫、木越義則、藤田幸一	4. 発行年 2024年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 336
3. 書名 近現代熱帯アジアの経済発展 - 人口・環境・資源 -	

1. 著者名 Masato Shizume	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Springer	5. 総ページ数 132
3. 書名 The Japanese Economy During the Great Depression: The Emergence of Macroeconomic Policy in A Small and Open Economy, 1931-1936	

1. 著者名 杉原薫	4. 発行年 2020年
2. 出版社 名古屋大学出版会	5. 総ページ数 776
3. 書名 世界史のなかの東アジアの奇跡	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	石川 亮太 (Ishikawa Ryota) (00363416)	立命館大学・経営学部・教授 (34315)	
研究分担者	正木 響 (Masaki Toyomu) (30315527)	金沢大学・経済学経営学系・教授 (13301)	
研究分担者	杉原 薫 (Sugihara Kaoru) (60117950)	総合地球環境学研究所・研究部・客員教授 名誉フェロー (64303)	
研究分担者	加藤 慶一郎 (Kato Keiichiro) (60267862)	大阪商業大学・総合経営学部・教授 (34410)	
研究分担者	鎮目 雅人 (Shizume Masato) (80432558)	早稲田大学・政治経済学術院・教授 (32689)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	石津 美奈 (Ishizu Mina)	ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス・Department of Economic History・Guest Teacher	
研究協力者	ファン ボチョブ クリスティアン (van Bochove Christiaan)	ユトレヒト大学・Department of History and Art History・Associate Professor	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	フェンストラ アルベルト (Feenstra Albeto)	ライデン大学・Institute for History・Assistant Professor	
研究協力者	ハドソン パット (Pat Hudson)	カーディフ大学・Emeritus Professor	
研究協力者	岩橋 勝 (Iwahashi Masaru)	松山大学・名誉教授	
研究協力者	大石田 真弥 (Oishida Shinya)	東京大学・経済学研究科・大学院生	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関